

24007-2

「BCR入室中の子どもに対する保育の効果」

中村 直子

兵庫県立こども病院 血液主体病棟 保育士

<はじめに>

当院の血液主体病棟には2名の保育士が配属され、入院中の子どもに遊びを提供し成長発達の援助を行っている。血液主体病棟には移植が必要な子どもも入院しており、移植後の子どもはBCR（バイオクリーンルーム）に入室するため病棟から転棟する。子どもにとってBCRの環境は刺激に乏しく、家族・医療者という限られた人間関係の中での生活となっている。そのため保育士は平成12年よりBCRで化学療法や移植を行う幼児を中心に訪問保育を行ってきた。BCRでは子どもの倦怠感の度合いや感染防止のため保育士の入室制限があり、十分な保育を行えないことがある。このような保育環境の中でもより効果的な保育を提供したいと考え、BCRで行ってきた保育について家族へのインタビューと記録の検証を行い、有意義な結果が出たので発表する。

<目的>

BCRで行ってきた保育の有用性を検証し、個々の子どもに適した保育を考察することで、より充実した保育を探求する。

<方法>

半構成的面接法を用い、インタビューを行った。

・対象者：BCRに入室した2歳～4歳の子どもと家族3名
・期間：平成18年6月～8月

インタビューの逐語録より、家族の心情や子どもの保育に関する言動を抽出し、保育士4人で分析した。

<結果>

インタビュー調査から、家族は子どもの体調にかかわらず保育の必要性を感じていることが分かった。訪問後、どの子どもも保育のことを話し、保育と同じ遊びを行うなど刺激を受けていた。家族からは「子どもの状態に合わせて保育内容を変更してほしい」との声が聞かれた。記録からはBCRに行く前の入院生活が短期で保育士との関わりが少なく、BCRでの保育参加意欲が低いことが判明した。

<考察>

本調査より、BCRでの保育は子どもにとって楽しみの一つとなっており、刺激の少ない環境の中で有意義であることが分かった。今後保育士が、子どもと家族の意見を適時聞きながら保育を進めること、BCRの環境に応じた保育が行えるよう努力することで保育の質が高まると考えられる。そのために保育士は、BCRに関わる医療者と連携を取りながら子どもの状態を把握し保育を行うことが大切であり、今まで以上にBCRでの保育の有用性についてスタッフや家族に周知していく必要がある。尚、上記の報告は、保護者に書面と口頭で、研究の旨・プライバシーの保護などを説明し同意を得たものである。

24007-3

血液・腫瘍疾患で入院経験のある者の入院体験の捉え方

宮川 祐子

千葉大学医学部附属病院

【目的】

血液・腫瘍疾患で長期入院の経験がある者が、自分の入院体験をどのように捉えているのかを知り、入院体験を肯定的にする要因を明らかにし、入院体験を肯定的にするための看護援助を検討する。

【方法】

対象者は、血液・腫瘍疾患で学童期以降に長期入院の経験がある現在外来通院中の者とした。調査方法は、カルテより情報収集した上で、「入院体験をどのように捉えているか」「入院生活でのたのしかった・うれしかった体験」「がんばった体験」「入院体験による自分の成長」について、半構成的面接を実施した。許可が得られた場合には録音し、録音した内容は逐語録にし、その言葉の意味を分析・分類し、検討した。

【結果・考察】

調査を行ったのは9人で、入院時の年齢は、学童期が5人、思春期が4人だった。入院体験について肯定的に捉えていたのは4人で、肯定的にも否定的にも捉えていたのは5人で、否定的にだけ捉えたケースはいなかった。肯定的にとらえた理由としては、学童期に入院していたケースでは、入院生活でのたのしかった・うれしかった体験があった。思春期に入院していたケースではそれに加えて、入院体験による自分の成長があった。

入院生活でのたのしかった・うれしかった体験としては、他患児とのかかわり、院内学級、前籍校の友人や担任とのかかわり、看護師・医師とのかかわりがあった。

入院体験による成長については、好き嫌いが減ったことやゲームが強くなったことなど、入院生活よる変化から成長を捉える場合と、がんばった体験から成長を捉える場合があった。入院体験での治療・処置をがんばった体験として捉え、それが成長を感じさせていたと考えられる。青年期のケースでは成長を捉えていたが、学童期・思春期のケースでは成長を捉えられたケースは少なく、がんばった体験にとどまっていたり、治療や処置がなかった体験や当然のこととして残っていた。

入院生活を肯定的にする要因としては、入院生活でのたのしかった・うれしかった体験と、入院体験による自分の成長があることがわかった。他患児や前籍校とのかかわり、院内学級でのたのしい・うれしい体験を増やすことや、入院体験での自分の成長を捉えられるような関わりが大切である。

なお、対象者には文書を用いて、研究目的・方法について説明し、同意を得た上で研究に参加していただきました。